「日本語特別教育」担当者への覚え書き

中　村　一　郎

筆者は、1994年度秋学期から2000年度春学期まで、担当教員の１人として日本語特別教育（SPECIAL JAPANESE 以下、SJ と略す）コースに係わってきた。その間、1996年３月には、『ICU 帰国本科生に対する日本語教育プログラム開発に関する研究：スペシャル・ジャパニーズ　カリキュラム検討報告』（以下、『カリキュラム検討報告』と略す）が出版され、1997年度秋学期からは、SJ-A、SJ-B、SJ-C という形で、新カリキュラムが実施された。

帰国本科生に対する SJ コースは、日本語教育プログラムの一方の柱である。さらに、優れた資質を備えた帰国学生がICUに入学し続けてくれることは、大学全体にとっても重大な戦略的な意味を持っている。SJ コースは今後も、ときに担当者を交替しつつ、発展していく。以下に、１）日本語能力から見た帰国生の類型、２）帰国生とはだれか、３）帰国生が必要としている日本語能力、４）SJ 担当教員に求められているもの、５）履修学生への注意、という５点を覚え書きとして記しておく。

１．日本語能力から見た帰国生の類型

ICU に入学してくる帰国生の日本語能力は、ほぼ以下の５つの類型に分けられる。

1）　日本語の支援を必要としないグループ

中学卒業時までを日本の学校で過ごしている学生が多い。なかには高２、高３だけを海外で過ごしている場合もある。

2）　SJ-C を必要とするグループ

中学の途中から海外の学校で過ごしている学生が多い。このタイプの学生は、帰国生であっても日本語能力には自信を持っている学生が目立つ。SJ-C を履修する必要があることが当初はなかなか理解できない学生も多い。

3）　SJ-B を必要とするグループ

小学校６年生までの課程を日本ないし、海外の日本人学校で終えている学生が多い。なかには、幼児期以降をほとんど海外で過ごしている学生もいる。海外での滞在年数の長さにかかわらず、現地の補習校で小・中・高の課程を履修したり、通信教育を受講したり、なんらかの形で日本語学習を継続している学生が多い。

4）　SJ-A を必要とするグループ

このグループは日本語能力の差が大きい。日本に帰国するまでの大部分の時間を海外で過ごした学生、小学校低学年で海外に行っている学生など、その海外経験もさまざ

までである。漢字（特に、書き方）は、教育漢字の初歩からの復習が必要である。

5） SJ履修が不可能なグループ

例年、2，3名というごく少数ではあるが、SJを履修するレベルに達していない学生が入学する。海外で生まれ、教育はすべて現地校で受けている。日本語は家庭内で話すのみで、漢字の読み書きはほとんどできない。日本語プログラムはこれらの学生への対応に非常に苦慮している。外国人学生用の中級後半程度のコースからスタートさせているのが実状である。

2．帰国生とはだれか

ここに、2000年度SJ-B春学期終了直前（ICU入学後約10ヶ月）に書かれた1人の学生の文章の1部分を掲げる。書き手は、現在本学人文科学科3年生の川井未保子さん。本人の了解のもとに、ここに紹介する。

「19年、たった19年間かもしれないが、経験し、考え、得たものは計り知れないものがある。それらを言葉に変換させ、他者に伝えることは、何よりも困難なことであると私は考える。だが、簡単なことではないからと言って、伝えようとする努力を怠るのでは何の意味もなく、一生誰にも分かってもらうことはできないだろう。」

さらに、この学生は以下のようにも述べている。

「帰国子女として身をもって経験したことなどを小論文にする機会は幾度かあったが文面を意識しすぎたせいか、いつもどこかぎこちなく、「自分らしさ」に欠けていることが殆どだった。充実した単語を使い、人に感動を与える友人を見ては羨んでいた。そして、下手な表現力によって、間違った自分を表現してしまうことを恐れた。」

筆者は、この学生の文章の中に、帰国生とはだれか、また、帰国生と日本語との関係は何かが、本質的に語られていると考える。「経験し、考え、得たもの」の「計り知れない」大きさと、日本語の使用が不完全であると自分自身が認識していることから来る「恐れ」。この両者の乖離は簡単には解決できない。程度の差、認識の差はあるが、これは日本語の支援を必要としている帰国生たち全員が心の底で共有している思いであると筆者は想像する。過去6年間にわたり読み続けてきた個々の帰国生たちの文章と重ね合わせながら、ほぼ確信を持って、想像する。

3．帰国生が必要としている日本語能力

帰国生が必要としている日本語能力に関しては、上記『カリキュラム検討報告』を参照。特に、小澤伊久美「ファカルティーに対するニーズ調査」、丸山千歌「帰国生に対するニーズ調査」、丸山千歌・小澤伊久美「SJの最終到達目標-ニーズ調査結果の比較から-」に、詳細な報告がある。

帰国生が身につけていると考えられている高い外国語能力も、日本語能力の高さとあいまってはじめて、十二分に生かされる。この点は、企業の幹部など学外に人脈を持つICUの教員たちからもしばしば指摘されている。帰国生には折に触れて、この指摘を伝えていくことが大切である。日本語の勉強意欲を支え、励ます大きな力となる。

要は、SJの各コースにおいて、それぞれの到達目標を達成するように目指すこと。そして、残りの3年間の大学生活全般をとおし、日本で教育を受けてきた学生たちに引けを取らない日本語力を身につけて、卒業し、社会に出ていくこと。以上の点を、学生に明確に意識させることが肝要である。

4．SJ担当教師に求められるもの

SJを担当する教員に求められているものは何か。第1は、帰国生がどのような学生であるかということを理解しようとしていることである。第2は、理解した帰国生にどう対応するかである。

第1に関しては、上記2．を参考にしてほしい。しかし、これはあくまでも短い覚え書きである。SJ担当が決ったら、関係研究論文、報告書、帰国生自身による出版物等に目を通す。そして、実際にクラスで学生と接触しつつ、各自が帰国生とはだれかを考え続ける。担当者ひとりひとりによる帰国生の「発見」以上に、SJコースを発展させていくものはないと、考える。

この際の、キーワードの一つは「多様性」となるであろう。滞在国及びその言語と文化。滞在年数。現地での教育機関（現地校、日本人学校、インターナショナル・スクールなど）。大学入学資格（SAT、Aレベル、バカロレア、インターナショナル・バカロレア、アビトゥアなど）。親の滞在目的。帰国生本人の意志による滞在。滞在中の日本語教育に対する各家庭の意識。帰国時の意識（本人の意志、両親の希望など）。特に、帰国生相互の間の英語力の差の存在も指摘しておく。帰国生たちはこの事実に対して敏感であり、学内での人間関係の構築においても微妙で複雑な影響を与えている。個々の帰国生の背景は、多様性に富んでいる。帰国生はひとり、ひとりがユニークな存在であり、決して「帰国子女」として、ひとつの枠にはくくれない。

第2に関しては、2つの視点から考える必要がある。ひとつは、帰国生ひとり、ひとりの問いかけに対して、教師がいかに真摯に人格的な応答ができるかである。非常に困難な課題であるが、課題としてはあげておかなくてはならない。

ふたつめは、日本語に対する技術的な支援である。ここでも、ひとりひとりの学生が抱えている問題点が異なっていることを、まず把握することが重要である。問題は漢字や漢字語彙なのか。助詞レベルの問題をも抱えているのか。日本語としての構成力の問題なのか。それらが、どのように入り組んでいるのか。あるいは、単にサボっているのか。宿題

のフィードバックも、学生個々に対して有効なもの、学生全体に対して有効なものがある。これらを把握し、コメントは、必要としている学生に適切なタイミングで行うこと。さらに、教師の日本語理解自体にしても、人によって異なることはつねに起こりうる。教師自身が、日本語に対して開かれた心を持っていること、これも欠かせないことだと考える。

敢えて、SJ担当教員の資質は何かと問われれば、読解教材を選ぶ目と、学生の発言・文章等の真意を見抜こうとする意志とでも、言えるだろうか。

5．学生への注意

最後に、SJを履修する学生への注意を記す。

第1は、何をおいても、単位を落とさないようにさせることである。大学生になって、小学生のように来る日も来る日も、漢字を書き、覚えるということは、学生たちにとっては非常な苦痛を伴うものだと考える。何らかの個人的事情が重なり、勉強に身が入らないことも大いに起こりうる。帰国後のカルチャー・ショックと帰属意識への葛藤のただなかで苦しんでいることも考えられる。

しかし、SJはICUの卒業要件である。他のコースをすべて立派に履修しても、SJが履修できていなければ卒業はできない。1度落とすと、つぎの機会は1年後になる。1年下の新入生といっしょに勉強をする際には、心理的負担も増加する。2年、3年かかっても克服することは容易ではない。残念なことであるが、このようなケースを筆者たちは見てきた。とにかく単位を落とすことなく、1年間で履修させることを教師は銘記しておくべきである。

第2は、第1とも密接な関連を持っている。このコースの厳しさを自覚させることである。自分に負けたら継続することが困難になる。負けるスキを与えないように、SJでは毎時間を漢字クイズで始めている。教師も、遅刻しない。定刻にクイズを始める。理由の如何を問わず、クイズの追試はしない。実に単純なことであるが、ここをひとつの歯止めとして、やってきている。

第3は、到達目標を指し示しつづけることである。学年の始めに各コースの年間の到達目標と、最初の学期の目標を明確に示すこと。そして、学期の途中でも、機会をとらえて年間の到達目標を繰り返し話していく。今やっているこの課題は、SJコース全体の中でどのような意味を持っているかを、伝え、励まし続ける。

優秀な帰国生をICUは取り続けることができるか。ICU全体に対する大きな問いかけである。日本語教育プログラムという現場から、この問いを投げかける。この問いと格闘を続け、報告を続けることにより、われわれもICUという営みに、困難ではあるが、希望を持ちつつ参加していく。